

巻頭言

柳城学院創立 125 周年を迎えて

名古屋柳城短期大学

学長 菊 地 伸 二

2023 年で柳城学院は創立 125 周年を迎えた。

1898 年にマーガレット・M・ヤング先生が保姆養成を開始してから 125 年が経過したことになる。その翌年の 1899 年にはヤング先生は幼稚園をスタートさせたが、開設してから 10 年くらい経ったところに彼女が本国カナダへ送った報告書に、次のような内容のことが記されている。

*

柳城とは名古屋城の名前。幼稚園とは子どもの庭のこと。最近わたしたちはこんな歌詞の歌を作ってみんなで歌っている。

♪城の影にある 子どもたちの この小さな庭は何？
それは イエスさまが導いてくれる 子どもたちの庭
今はまだほんのつぼみで小さいけれど 美しい花になることを願いながら
先生たちは毎日親切に世話をしてくれている
子どもたちは きっと親や先生に喜びをもたらし
恵み深い天の父の御用に仕えることになるでしょう♪

ヤング先生の生まれた故郷には、柳の木が生息していたことから、彼女は柳城という名前をとっても気に入っていたとも言われるが、この歌詞には、ヤング先生のまっすぐな気持ちが表れているのを感じることができる。

大きな名古屋城に見守られながら、イエスさまに導かれている子どもたちの小さな庭がそこにはあり、その庭で安心して育っていくことを願う気持ちが伝わってくる。また、小さなつぼみを幼稚園の先生たちが大切にお世話をしながら育てていて、そのような愛情をたっぷり浴びた子どもたちはやがて親や先生にも喜びをもたらし、ひいては神様の御用のためにも働くという願いや希望が、伝わってくる歌詞である。

ここには、わたしたちが、次の時代に受け継がなくてはならない精神がたしかに流れている。それは、わたしたちが守っていかなくてはならない大切な心であり、いつでもそこへと戻らなくてはならない精神でもある。

*

2023 年 6 月に行われた創立 125 周年記念講演会で、恵泉女学園大学の学長である大日向雅美先生は、「保育に生きるとは～子どもたちの未来を創る皆様へ～」というタイトルでお話をしてくださった。タイトルにある、保育に生きること、それは子どもたちの未来を創ることである、というこの言葉は、先ほどのヤング先生の、歌の歌詞とも連動するものである。

いまの時代は、さまざまな問題が渦巻いている。時代が変われば、社会の課題も異なってくるし、

柳城学院創立 125 周年を迎えて

親や子どもが置かれている状況や取り巻く環境も刻々と変化していくだろう。したがってもちろん、保育者に求められるものも同じではないだろう。

ただ、そのように時代は変わっても、その時々時代の影響を受けながら、子どもという存在に惹きつけられ、子どもという存在に関心やこだわりをもちながら、自らの生き方を真摯に問い続ける変わらない保育者の姿勢があり、大日向先生は、その姿勢を、不屈の精神で歴史を生き抜いてきた、フランスのバリの標語にもなっている「たゆたえども沈まず Fluctuat nec mergitur（嵐や風が吹いて揺れながらも、沈むことはない）」と例えた。そして、子どもと、また、自分自身と向き合って生きる保育者を目指すわたしたちにエールを送ってくださった。

*

柳城のこれからの歩みも、そのような保育者の変わらない在り方を、私たち自身の在り方として引き受けることによって始まることを、心に刻み込みたいと思う。

*

今回の研究紀要には、創立 125 周年記念礼拝の折に、祝辞を賜った西原廉太主教様の文章が掲載されている。西原先生は、創設者のヤング先生のまさしく同労者とも言えるトレント先生のことについて言及され、創設者は一人ではなく、多くの周囲の支えの中で、柳城学院が創設されたこと、そしてそれこそまさしく神のくすしき御業であることをわたしたちに伝えてくださった。

本文章は、2023 年創立記念礼拝の際の式辞に手を加えたものである。